〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌』第十六回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三五三首（一般部門）の中から第十六回目となる年間優秀作品が決定いたしました。

今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

光さす
南昌荘の床もみじ
遊びいる子の歌を映して

秋田県大仙市　鈴木　仁

【受賞者からのコメント】
銀杏の黄葉と楓の紅葉が、濡れた敷石に美しく降り続く南昌荘を訪ねた。秋田との縁も深いこの建物が今に遺り、人々の憩いの場となっているのが嬉しくて何度も足を運ぶ私の横を、幼い女の子が駆け抜けて行った。

【審査員講評】
（山本豊）　南昌荘は明治時代に建造された建物であり、時ながく磨かれた木の床に映っているもみじは、おもむきを一層深めている。下句の「遊びいる子の歌を映して」は、詩情を深めた表現であり、読後感が長く心に残る。
（赤澤）　美しい抒情歌である。南昌荘に行ったことのある人であれば、この歌の味わいが良く分かるだろう。古い建築物であるが、清楚で訪れる旅行者を持て成してくれる。作者は優しい言葉でそれを詠んだ。賞に相応しい歌だ。
（山本玲子）　小春日和の休日、刹那のひと時を南昌荘で交わる「もみじ」と「子供」。共に移ろう季節の中で振り返ることもないだろう。啄木も、歌にこの一瞬を閉じ込めるか、小説の一コマとして物語にするか迷ったに違いない。
（吉田）　南昌荘のよく磨かれた床に映る色鮮やかな紅葉を詠んだ作品。その幻想的な美しさは古（いにしえ）から現代までの遊ぶ子どもたちの歌も包み込んでいるようである。視覚的にも聴覚的にも奥行きのある優れた作品である。

年間優秀賞（二首）

啄木のゆかりの街を
歩みゆき旅のをはりに
鉄瓶を買ふ

奈良県奈良市　和田　康

【受賞者からのコメント】
啄木と鉄瓶とコーヒーの旅でした。旭橋から望む岩手山はとてもきれいでした。「一握の砂」は私の教科書で読むたびに仕掛けてきます。鉄瓶はもう完全に家族の一員になっています。私はほんとうに幸せ者です。

【審査員講評】
（山本豊）　啄木に関わる歌は数多く詠まれているが、下句の「旅のをはりに鉄瓶を買ふ」という事実のみを詠うことにより、これまでの啄木に関わる歌にありがちな、情のすぎた歌と一線を画している質の高い作品である。
（赤澤）　作者は奈良県から訪れた。石川啄木に憧れを持っているのだろう。お土産に南部鉄瓶を購った。四句の「旅のをはりに」が歌に輪郭をと与えた。鉄瓶は作者に折々旅を思い出させてくれるだろう。記憶に鮮明な歌である。
（山本玲子）　正直に言うと私は、こういう飾らない歌が好きだ。盛岡の確かな思い出として、ずっしりと手のひらに乗った鉄瓶を想像せずにはいられない。月並みかもしれないが、お茶を飲むたびに盛岡を振り返ってもらえたらと思う。
（吉田）　啄木に心惹かれて訪れた盛岡はどんな街だっただろうか。ゆったりとした調べと下の句に作者の旅への満足感が表れている。お土産に買った鉄瓶は使うたびに盛岡の街を思い出させてくれることだろう。

公園の羅漢如来の
祈る手に
飯盛るごとく雪降り積もる

盛岡市　西川　政勝

【受賞者からのコメント】
この公園は、昔の寺院跡で今は餓死供養のために作られた二十一体の石仏を残すのみである。この石仏は一八四九年の完成以来、風雪に耐え人々の暮しを温かく見守り、その祈る手に雪積もる様は、恰（あたか）も飯盛るごとく見える。

【審査員講評】
（山本豊）　江戸時代に盛岡藩は四大飢饉といわれる大凶作により多数の餓死者が出た。死者の供養のために建立された十六羅漢と五智如来の石仏の手に、飯を盛るように雪が降り積む情景は、歴史の重さを感じさせる内容の濃い歌である。
（赤澤）　比喩が卓抜である。それを思いついた瞬間に歌はできただろう。比喩の歌は、それが優れているかどうかで決まってしまう。これを詠んだとき、作者はほくそ笑んだに違いない。この歌に出会えたことは私の幸福でもある。
（山本玲子）　誰しもこの歌を見たら雪が降り積もった羅漢公園が目に浮かぶだろう。と同時に作者のユーモアのセンスに脱帽する。祈りが叶ったのか、飯を盛られた「願ったり叶ったり」の羅漢如来はどこかお茶目に思える。
（吉田）　盛岡市茶畑のらかん公園には十六羅漢と五智如来が広場を囲んで座していらっしゃる。飢饉による餓死者を供養するために造られたことを思うと、下の句にこめられた鎮魂の気持ちが感慨深い。格調高い秀作である。

年間奨励賞（三首）

もりおかの
夏はさんさの幸呼来と
太鼓の音で幸せ願う

盛岡市　赤坂　昌信

【受賞者からのコメント】
年間奨励賞をいただきありがとうございました。さんさ踊りの掛け声を詩に入れようと色々考えましたが、「読んで字の如く」としたのが良かったのかなぁ！副賞の木彫の盾が素敵だと思います。

【審査員講評】
（山本豊）　昭和五十三年に開催されたさんさ踊りは、今年で四十七回目を迎えた。笛や鉦の音、そして何より和太鼓の迫力に満ちた響きは、踊り手にも観客にも生命の尊さを感じさせる。全ての人間が幸せであることを願わずにいられない。
（赤澤）　作者は昨年、優秀賞を獲得している。二年続けて賞にはいるのだから実力者だ。「さっこら」はさんさ踊りのかけ声の一部だが、「幸呼来」と掛けたのは、誰か知らないが上手い。こう思ってかけ声を発すれば楽しいだろう。いかに言葉を選ぶかが、短歌を決める。
（山本玲子）　盛岡の夏の夜空に人々の願いを乗せたさんさが舞う。単なる掛け声だったかもしれないし、できた当初には意味があったかもしれない。大切なことは正解が何かではなく、幸せを願う心で歌い継がれていることだろう。
（吉田）　盛岡の夏と言えば「さんさ踊り」で、踊るのも見るのも楽しく心が浮き立つ祭りである。弾むようなリズムと勢いのある言葉の選択でさんさにふさわしい一首に仕上がった。踊る者見る者の明るい笑顔が浮かぶ作品。

追憶に耽る窓辺や
不来方の城址眺める
冬の病室

青森県青森市　加藤　健一郎

【受賞者からのコメント】
不来方の城址を眺めながら、来し方に思いを馳せる。浮かんでは消える様々な出来事。もしも病室でなかったら、冬でなかったら全く違う景色に見えるのだろう。そんな気持ちを歌にしました。有難うございました。

【審査員講評】
（山本豊）　何かの病気で入院を余儀なくされている作者の心情が静かに伝わってくる。冬の病室の窓辺から、追憶に耽けながら不来方城址を眺めている、というだけの感情を抑えた表現が抒情性を高めている。
（赤澤）　知人の入院を詠んだものか、自身を詠んだものかは分からない。しかし、病室の持つ陰鬱さを表現している。「もりおかの短歌」には珍しい内容だろうが、歌はしっかりしている。この歌も抒情詩と言って良い歌である。
（山本玲子）　岩手医大が内丸にあった頃を想起して歌にしたのだろうか。いやいや作者が実際に入院しているのだろうか。いずれにしても、人生の中で自分を見つめ直す時期も必要だと思う。そのときは私も不来方を思うことだろう。
（吉田）　過ぎ去ったさまざまなことを思う病室の窓辺から不来方のお城の跡が見える。物静かな詠みぶりは作者の追憶が豊かで満ち足りたものであることが自然と想像される。ご病気の快癒をお祈りいたします。